

近代の国づくり（1867～1900） その12

《古市公威（きみたけ）の活躍》

明治憲法制定に前後して、近代の内政統治の原形が誕生します。インフラでは、東京の市区改正、東京府水道整備、横浜港築港と、首都圏で同時期に進行します。その時期、治水政策の大転換を余儀なくされる出来事が、西日本で勃発します。

淀川は、1874年（明治7）から、お雇い外国人デ・レーケの指導のもと、水運のために淀川の水深を確保するべく、河道の土砂堆積を抑止する上流砂防工事と淀川の流路整正（低水工事）を行なっています。

しかし、1885年（明治18）の淀川大洪水により、大阪は大被害を受け、洪水防御の抜本的対策が叫ばれます。さらに1889年（明治22）にも洪水被害を受け、当初のデ・レーケの指導を受けた計画が、いわば破綻したのです。

吉野川では、内務省が流路整正、徳島県が築堤工事（高水工事）をする分担し、改修工事をしていましたが、1888年（明治21）、工事個所の覚円（かくえん）村において決壊し、43戸が流され、30人が死亡します。築堤工事は進まず、流路整正を行った段階でした。怒った村民たちは、県庁を襲って強訴。内務省は、改修工事を中止。高水工事を県が行う仕組みが、破綻したのです。

この変革の時期に登場したのが、内務省技師兼工部大学長の古市公威です。東京市区改正委員でもあった公威は、その任務途上でしたが、1888年（明治21）、山県内務大臣の欧州視察に随行します。

山県は、帰国すると、1889年（明治22）12月24日、内務大臣のまま、3代目の内閣総理大臣を兼務します。そして、内務省土木局長に古市公威を抜擢。初の技術畑出身の土木局長でした。このとき公威は、36歳。

淀川では、内務省技師の沖野忠雄が、大阪の第4土木監督署長となり、4年半をかけ、淀川放水路計画を立案します。しかし、既存のルールでは、放水路建設という高水工事は、府や地元が財源を負担する仕組みでしたから、到底できません。

1894年（明治27）6月、公威は、技監（土木局長兼務）に昇進し、沖野から「淀川高水防御計画意見書」が内務大臣に提出されます。そして内務大臣

は、公威ら8名からなる技術官会議に意見を求めました。

それは、日清戦争の2ヶ月前のことです。翌1895年（明治28）、日清講和条約（下関条約）締結後、技術官会議は、起工の手続きを進めることを認めると結論付けました。

そして、1896年（明治29）3月、「河川法」と「淀川、木曾川、筑後川三川の改修予算」とともに国会を通過しました。（吉野川の改修再開は、1902年（明治35）まで待たねばなりません。）

淀川改修を具体的事案にして、日清戦争を挟みながらも河川法が誕生し、高水工事も国が行うという、河川行政の大転換がなされたのですね。

公威は、その後、大蔵省の委託をうけ（注4）、パーマーが計画した横浜築港計画の第1期事業完成に続き第2期計画を立案し、1899年（明治32）から着手。これにより、船を直接つけることができる岸壁、赤レンガ倉庫、横浜駅と連絡する臨海鉄道が整備されました。

なお三島由紀夫の本名は、平岡公威といますが、祖父が古市と同郷であり、彼の名前にあやかって付けたものです。

注1：古市公威（生没年：1854－1934年）

第1期文部省留学生として、フランスに留学し、土木工学や数学を学びます。帰国後内務省技官となる。河川法、砂防法制定、横浜第2期築港計画立案。初代土木学会長、帝国大学工科大学学長。初代日本工学会理事長、第2代理化学研究所長。なお、内務省退官は、1898年（明治33）、44歳のときでした。理化学研究所長時代の業績に関して、研究が待たれます。

注2：沖野忠雄（生没年：1854－1921年）

第2期文部省留学生として、フランスに留学。帰国後、職工学校（現在の東京工業大学）に勤務した後、内務省入省。第2代土木学会長

注3：技監は、技師の最高位ポストとして新設されたもの。技監→内閣技監と呼称が変わり、現在は、国土交通省技監として引き継がれています。

注4：なぜ大蔵省が築港するに到ったのでしょうか。横浜の地元からは、さらなる拡大築港要望が出されますが、内務省は消極的であったのに対し、大蔵省は、税関制度が整って築港の財源の見通しがあったからです。これ以降、港湾行政は、内務省と大蔵省と二元行政とな

り、所管を巡って時間がかかるようになり、一元化する運動が歴史を刻みます。

写真は、①古市公威像（東京大学本郷キャンパスに設置、細見撮影）、②古市公威の自宅（本郷に現存、重要文化財、細見撮影）、③河川・港湾・水利関係のお雇い外国人一覧（土木学会ライブラリー「工学教育、河川法・砂防法の整備」より）

①



②



③

名前	資格	月給 (来日当初)	雇用期間							
			明治	5	10	15	20	25	30	35
ファン・ドールン (蘭) C. J. Van Doorn (1837~1906)	長工師	500円		5. 3. 24	8. 4. 10	9. 4. 2	13. 7. 22			
エッセル (蘭) G. A. Escher (1843~1939)	1等工師	450円		6. 9. 25			11. 6. 30			
ムルデル (蘭) A. T. L. R. Mulder (1848~1901)	1等工師	475円				12. 3. 29	20. 5. 9	23. 5. 11		
リンドウ (蘭) I. A. Lindo (1847~1941)	2等工師	400円		5. 3. 24		8. 10. 31				
チッセン (蘭) A. H. T. K. Thissen (1843~1878)	3等工師	350円		6. 11. 15	9. 11. 14	9. 12. 1	10. 9. 28			
デ・レイケ (蘭) J. de Rijke (1842~1913)	4等工師	300円		6. 9. 22						36. 6. 18
ファン・гент (蘭) J. G. Van Gendt (1833~1880)	水理工師長	800円			12. 2. 17		13. 12. 21病没			
メーク (英) C. S. Meik (1853~1923)	港湾工師	不明					20. 6. 来日	23. 4		
パーマー (英) H. S. Palmer (1838~1893)	顧問土木師	500円			16. 2. 15 (三ヶ月)	17. 12. 1	20. 5. 31	21. 6. 23	26. 2. 10病没	
ブランドン (英) R. H. Brunton (1841~1901)	灯台築造首長	450ドル		慶応4. 2. 2	9. 3. 15					
バルトン (英) W. K. Burton (1855~1899)	工科大学衛生 工学教師	350円					20. 5. 26	29. 6. 20		

⑤-5 河川・港湾・水利関係御雇外国人技術者一覧。本表は建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所(編・刊)『デ・レーケとその業績』1987, p.27 所載の表「土木寮雇備オランダ人技術者一覧」およびユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』1975, 小学館などを元に加筆修正した。